

明転

マー君が一人、ベンチに座って自分の書いたラブレターを読んでいる  
しばらくすると内藤が一人の男をつれてやってくる

内藤 「おまたせ〜！」

マー君 「あーどうも！」

内藤 「手紙、かけましたか？」

マー君 「はい、書いたには書いたんですけどね・・・その〜」

そこにゲスト登場

ゲスト 「内藤君！」

内藤 「先生！お忙しいのにすいませんね！」

ゲスト 「いやいやいや」

内藤 「こちらが、昨日お話ししたマー君です。で、こちらが・・・」

ゲストの方は自己紹介をお願いします。

内藤 「先生は、僕の学生時代の先輩で、作曲家なんだよ！マー君の書いた手紙に曲をつけて  
もらおうと思ってね！相談したら快く引き受けてくれたんですよ、マー君、凄い先生  
なんだからね〜」

マー君 「あっ、よろしくお願いします・・・」

以下、ゲストとフリーな感じで進行していく。

ゲストの方はマー君の手紙を好きなようにいじってください。

最終的に、曲を作る方向にもって行ってください。

しばらく進行してもらいよいよいとござい

内藤 「じゃー先生、お願いしますね。」

ゲスト 「了解、では、曲がかけたらまた、連絡するので・・・マー君だったかな？」

マー君 「はい・・・」

ゲスト 「最高の曲を提供するので、頑張ってくれたまえー！」

マー君 「はい・・・」

ゲスト「では……」

内藤「先生、ありがとうございます」

内藤、ゲストを見送り戻ってきて

内藤「マー君、よかったね！先生の作ってくれた曲で、告白したら完璧だから！」

マー君「はー……あの、そのことなんですけど……」

内藤「なに？どうしたの？あまり乗り気じゃないみたいだね？」

マー君「いや、その、もう意味ないんです？」

内藤「はい？」

マー君「内藤さんせっかく色々動いていただいたのに、本当にすみません……マミ先生には、振られました」

内藤「はい?????なんで？」

マー君「いや、僕が手紙を書いて、それに音楽をつけてマミ先生への思いを伝えるという旨を話したんですね？」

内藤「は？なんで話しちゃったんですか？」

マー君「なんか嬉しくなっちゃいましたね」

内藤「だからと言って、話しちゃダメでしょ！こういうのはですね、突然やるから効果があるんですよ！」

マー君「それはわかってるんですけどね……」

内藤「わかってないじゃないですか！どうするんですか？先生だってあんなにノリノリで帰って行ったのに……」

マー君「すみません……」

内藤「で、なんて言われたんですか？マミ先生には？」

マー君「駅前のスタバで、こうストローつまみながら『なんか重いね！私そついうの苦手だから……もつとラフな感じで、お付き合ひできたらなと思ってたんで……私とマー君とではなんか恋愛観が違うみたいね』と……」

内藤「マーそうなるでしょうな……だいたい、彼女に思いを伝えるというのを、前もっていう人なんていませんよ！そりゃ重いな〜って思いますよ」

マー君「すみません……でもですね、一人、気になる子がいるんで、歌ができればその子に歌ってみます……」

内藤「何言ってるんですか？だいたいあのラブレターはマミ先生の事を思って書いたんですよ……」

マー君 「はい、最初はそうだったんですけど、書いてる途中で振られてしまったので、途中で  
らシフトチェンジしたんです。」

内藤 「シフトチェンジって・・・軽いなくあんた軽すぎるよ！そんなんじゃ彼女なんてでき  
るわけないよ！」

マー君 「わかってますよ、でもしょうがないじゃないですか！内藤さんと約束しちゃってたん  
ですから、明日までに手紙を書くなって・・・」

内藤 「だからって・・・」

マー君 「内藤さんが、見ず知らずの僕のために、ここまで親身になってやってくれてるのに、  
適当なことできないじゃないですか？・・・初めてなんですよ！」

内藤 「はじめて？」

マー君 「僕、鹿児島から、たった一人で出てきてましてね、今までいるんなことあったんですけ  
ど、人にこんなに親切にされたのはじめてなんです。だからなんとか内藤さんの期待  
に応えたいなと思ってますね・・・だから振られた後でも頑張って手紙を書いたんで  
すよ！でも、手紙を書くと言っても誰かのことを思い浮かべないとかけないじゃない  
ですか？思いを伝えるわけだから・・・だから、そのく、ちょっと気になるこのこと  
思い出して書いたんです。」

内藤 「そうですか・・・で、その子はどこのどなたですか？」

マー君 「はい、そのファミマで働いてる人なんですけどね」

内藤 「そのファミマ？」

マー君 「はい--」

内藤 「そのファミマにそんな可愛い子いましたっけ？」

マー君 「いるんですよ！笑顔がとても素敵なんです。買い物した後、お釣りをくれる時も、必  
ずこう手を握って、渡してくれるんですよ！多分ですね、彼女の方も僕に少しは気が  
あるんじゃないかなと思うんですよね！」

内藤 「それは、みんなにしてるんじゃないですか？」

マー君 「そんなことないですよ、だって僕の前のお客さんの手は握ってなかったですよ。内藤  
さんだって、手なんか握られたことないでしょ？」

内藤 「えー、あんまり意識してないので覚えてませんが・・・」

マー君 「それに手を握るって結構勇気いるじゃないですか？・・・」

内藤 「ではその子のことを思って書いたのがさっきの手紙なんですか？」

マー君 「はい・・・」

内藤 「わかりました。歌いましょうーそのファミマでバイトしてる、えーと・・・」

マー君 「美子さんです。」

内藤 「はい、美子さんのために歌いましょう！いいですか、くれぐれも言っときますが今回は先に歌を作るとか言っちゃダメですよ！」

マー君 「わかってます！」

内藤 「では曲ができたならこちらから連絡しますね！」

マー君 「はい、ありがとうございます。なんかすいませんね……」

内藤 「いや、いいですよ、こちらも乗り掛かった船ですからね、もうこつなったらマー君にちゃんとした彼女ができるまでおついいいしますよ！」

内藤、マー君と硬い握手をする！

マー君 「ところで、内藤さんのお宅の方はどうなんですか？その……娘さんとジャニーズの関係は？……」

内藤 「あー、ズンバですね！……バッチリ言ってやりましたよ！そんなところには行かせないとね……だいたい、親のすねをかじってる身分で彼氏と中国にどんちゃん騒ぎしに行くなんて何事だって！100歩譲って、付き合つのは認めてやる！しかし旅行とかそういうのは二人が成人になってからだよね！」

マー君 「ほーほ……娘さん納得しましたか？」

内藤 「全然ですよ！納得どころか、それ以来部屋に閉じこもって私の話を全く聞こうとしないですよ！挙句に妻までがですね、『パパは頭が固いんだから！二人が行きたいって言ってるんだから旅行ぐらい行かせてあげればいいのに、たっ君は底らへんのチャランポランな子と違ってしっかりしてるから大丈夫よ！』なんて言い出しましてね。」

マー君 「そうなんですか……あの、もし良かったら僕が娘さんとお話しましょうか？」

内藤 「マー君がですか？……なんて？」

マー君 「はい、内藤さんの気持ちをですね？僕が代弁するといいますが、その……」

内藤 「大丈夫です！自分の家の問題は自分でなんとかしますから……それに……」

マー君 「それに？」

内藤 「いや、なんでもありません。……それよりマー君、歌ができたらしっかり頼みますよ！」

マー君 「はい、それはもう任せといてください！」

内藤 「では、今日のところはお先に失礼しますね」

公園に一人残ったマー君を残しながらゆっくり明かりが消えていく

交差するように先生の作った曲が流れ出す。

明転すると内藤、マー君がベンチに座っている。

内藤 「とまーこういう曲が出来上がりました。」

マー君 「ありがとうございます。すごいですねちゃんと噛んだ感じの歌になってるし」

内藤 「そうなんだよ、そういうところが先生位のすごいところなんだな！」

マー君 「歌ってる方も方すごく上手ですね？」

内藤 「あくこれね、先生のお弟子さん！なんでも近々デビューするみたいですよ。」

マー君 「そうなんですか、プロの方なんですね、どうりでうまいわけだ！あの僕ですね、こんなに上手に歌えませんか！」

内藤 「いいですよ、うまくなくても、要は気持ちですから・・・マー君が美子さんをこんなにも思っているんだというのが伝わればいいんですから！」

マー君 「そうですね、気持ちですよ・・・じゃー早速聞いてもらってきますね！」

内藤 「まってまって！あんたバカか？」

マー君 「ばか？なんでばかなんですか？」

内藤 「だってまだちゃんと覚えてないでしょー聞いてもらおうなら、しっかり練習してからじゃないとーほら、私今日、ギター持ってきてますから練習しましょう！」

マー君 「・・・それもそうですね」

内藤、ギターを弾く準備をする！

内藤 「じゃー歌のところから行きますよー！」

マー君 「はいお願いします。」

内藤のギターに合わせてマー君歌い始めるが、かなりの音痴である

途中まで聞いて内藤何か考え込む

内藤 「マー君、あのさ、やっぱり歌じゃなくて手紙読むことにしようか？」

マー君 「えっ？なんですか？」

内藤 「いや、その・・・」

マー君 「僕の歌そんなにひどいですか？」

内藤 「うん、・・・なんと表現したらいいのかわからないんだけど、とにかく的が外れてるんだよね」

マー君 「的？」

内藤 「うん、その～サッカーボールを持ってきて野球やるっていうぐらい外れてるんだよ」

ねー」

マー君 「すみません意味がわかりません」

内藤 「うんだから、クリスマスなのにチキンじゃなくてお雑煮食べましょうみたいな……」

マー君 「……あー、チキンが歌でお雑煮が僕ですか？」

内藤 「まーまーとにかく、やっぱり歌うんじゃなくて手紙を読むことにしましょう！」

マー君 「なんでですか、歌おうって言ったの内藤さんじゃないですか、それに先生だって、かんでもばれないような曲にしてくれてるじゃないですか？」

内藤 「うんそうんだけどね、ほら、手紙を読んで伝えたほうが細かいニュアンスっていうの？それがちゃんと伝わると思うんだよね」

マー君 「そうですね！いや僕、結構この曲気に入っちゃったんですよ、せっかく作ってくれたんだし、やっぱり歌ったほうがいいと思います。」

そうこう言いながらマー君また歌い出す。

これまたかなり音が外れてる！

内藤、突然大声で！

内藤 「ダメなの？歌は歌っちゃダメだって！」

マー君 「なんなんですか大声出して！」

内藤 「頼むから、頼むから歌はやめよ！」

マー君 「いや、歌います。もう決めました！今歌ってて見えたんです。僕と美子さんが幸せそうに腕を組んで歩いてる姿が！」

内藤 「え〜良く見えたね？」

まーくん 「……僕確信したんですよ！今度は絶対にうまくいくって！」

内藤 「ダメだって……じゃーはつきり言っけどね……マー君はね、歌下手なの！いや、下手とかうまいとかの次元じゃないの、だって音程もリズム感もカミカミじゃない！いいかい、音程がとれないっていうのはね、算数で行ったら九九が出来ないようなものなの！」

マー君 「九九はできますよ！」

内藤 「とにかく、マー君の歌は致命傷なの！ジャイアンレベルなの！そんな歌聞かされたら100年の恋だって冷めますよ！……」

マー君 「……」

内藤 「ね、だからさ、歌は諦めよう！」

少しの間

マー君 「内藤さんっていつもそつなんですね!」

内藤 「いつも?」

マー君 「そうです!いつもそつです。娘さんの中国の話だってそうですよ、彼氏と行きたいって言ってるんだから行かせてあげればいいじゃないですか!高校生だから旅行はダメ、誕生日じゃないから手巻きはダメって!ダメダメダメって全部ダメじゃないですか!少しは娘さんの気持ち考えてあげたことあるんですか?」

内藤 「それとこれとは全然関係ないでしょ!」

マー君 「関係なくないですよ!いいですか、高校生といったらもう十分大人ですよ!こちらの言うことも理解できるし、やっていいことと悪いことの分別だっつつくんです。恋だつてするし、いろんなことに興味を持つ年頃なんですよ!それを頭ごなしにダメだ、ダメだって言ったら余計反抗したくなるに決まってるじゃないですか?僕だって何度も何度も振られてようやくここまでたどり着いたんです。諦めるわけにはいかないんですよ」

内藤 「娘の問題とマー君の問題を一緒にしないでくれるかな、いいかい、娘はまだ17歳なんだよ!何かあった時に自分で責任取れないんだよ!男と二人で旅行に行くなんて言語道断なんだよ!」

マー君 「自分はごうだったんですか?」

内藤 「は?」

マー君 「自分が高校生だった時のこと考えてくださいよ!何でもかんでも親のいいなりになんか成ってなかったでしょ!それでもちゃんと立派な大人になって、結婚してたくさんのお子さんに恵まれて幸せに暮らせてるんじゃないですか?もっと子供のこと信じてあげたらどうなんですか?」

内藤 「それは・・・」

マー君 「僕だって一緒ですよ!やってみないとわからないじゃないですか?ちょっと歌が下手だからって諦めるって!それじゃ戦わずして負けるってことじゃないですか?僕は負けません!ぼ、ぼ、僕の心に」

内藤 「いや、その歌はわかるだろうー!ちょっと下手ってレベルじゃないんだから・・・それに、告白するのをやめると言ってるわけじゃないでしょ!」

マー君 「そもそも僕を焚きつけたのは内藤さんなんですから!それに僕が歌うと決めただんだけらいんです。それで失恋したって後悔なんてしませんよ。それより、やれることやららないで失敗する方がよっぽどダメージでかいと思いますから・・・」

内藤 「……………」

マー君 「……………」

内藤 「マーいいんじゃないですが、マー君がそこまで言うんなら、やってみたら……………」

マー君 「はい、やりますよ！早速、今日歌を聴いてもらいます。」

内藤 「うん、頑張ってる……………」

マー君 「それじゃ失礼します。」

マー君、去っていく

一人残った内藤、ベンチに腰掛けてマー君の歌を口ずさんでみる

内藤なにかおもいあたることがあったのか電話をかける

内藤 「あつ、もしもし・パパだけど……………今日は何時頃帰ってくる……………うん、

ちょっと、お前とゆっくり話したいことがあってな……………えっ？怒る？なんで

怒るんだよ！怒ってなんかないよ……………マーあれだ、いろいろとお前の意見も聞き

たいと思ってる……………うん、じゃー夜な！」

内藤電話を切って、再び何か考え事をする。

そ声マー君が戻ってくる

マー君 「内藤さん……………」

内藤 「ん？」

マー君 「だめでした？」

内藤 「……………」

マー君 「見事に振られました！」

内藤 「やっぱり……………」

マー君 「はい、善は急げと思ってるね、あのまま彼女のバイト先に直行して歌ったんですよ！」

内藤 「うんうたってたね、そりゃあの歌じゃ失敗するでしょ」

マー君 「いや、歌はですねすごく喜んでくれました！『すごい！私のために作ってくれたん

ですかって？』でもね……………」

内藤 「でも？」

マー君 「彼女、結婚してたんです。」

内藤 「はい？」

マー君 「だから……………彼女には旦那さんとお子さんがいたんですよ！気持ちは嬉しいけど私に



は夫と息子がいるのでそういうのは無理ですって!」

内藤 「結婚って・・・マー君それ知らなかったの?」

マー君 「知りませんよ、指輪だっと思ってなかったし、だいち結婚してるって知ってたら好きに  
なんかありませんよ!」

内藤 「そりゃそうか・・・」

マー君 「いや〜びっくりですね・・・でもね、なんか今すごくスッキリしてるんです。嫌い  
とかそういうんじゃないよ物理的に無理だったわけですから、なんか諦めつきまし  
ね・・・何かこうスカ〜〜ととした気分ですよ!」

内藤 「そうですね・・・で、次はどんな人を好きになったんですか?」

マー君 「はい?次?次なんかいませんよ!そんなにポンポン好きな人なんかできるわけないじ  
ゃないですか!なんていうんですか、やっぱり運命的な出会いみたいなものがないと  
ね!」

内藤 「運命的な出会いね・・・」

マー君 「はい、いつかそういう出会いがあると信じてゆっくり探します。あっその時まで、  
しっかり練習しときますね!歌・・・」

内藤 「うんそれがいいよ!頑張っってね!」

マー君 「はい・・・」

内藤 「私ももう一度娘とゆっくり話し合ってみようと思ってますね。」

マー君 「???」

内藤 「マー君の言う通り、頭ごなしにダメダメ言い過ぎてたような気がするんだ!今までは  
娘が間違った方向に行かないようにすることだけ考えてたような気がします。娘には  
娘の人生があるんだし、自分の納得する道を進んでもらって、その道が間違いだとか  
付いた時には、100パーセントのフォローしてあげるのが親の務めなのかなと・・・  
子供っていうのはそうやって成長していくんでしょっね。もっと娘のことを信じてあ  
げないといけなく・・・」

マー君 「きっと、親が信じてあげればあげるほど、親のことを裏切らないような気がするんで  
すよ・・・」

内藤 「そうかもしれないね・・・」

内藤はけていく

一人残ったマー君のメールがなる

マー君そのメールを読んで

「マール君」えっ？まじで？……」

暗転